
消えたクリスマスプレゼント

イヌズキノネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えたクリスマスプレゼント

【著者名】

NO838D

【あらすじ】

平凡な家庭に生まれ育った矢代和樹。やじかずき そんな彼の平凡なクリスマスに起こった出来事。彼のプレゼントは一体どこに? - 短編小説で2部完結予定です -

前編（前書き）

現在書いている小説がシリアルなもので、少し「メモリー」を書きたくなりました。よろしければ、最後までご覧ください。

キーン、コーン、カーン、コーン
キーン、コーン、カーン、コーン

今日は12月24日。

世間では恋人たちが温もりを求めて寄り添い合って愛を深める、年に一度の特別な日。

イエスキリスト誕生の前夜祭。

今宵、世界が幸せに包まれる・・・

そんな日に、俺は学校で補習を受けさせられている。

なんで?なんて聞かないでくれ。理由は聞くまでもないだろ?

今学期のテストが目を瞑つたくなるほど・・・最悪だったから。
どのくらい悪かったのかだつて?

わかった、見せてやるよ。

成績表

1年4組36番

矢代

和樹（やしづ カズキ）

〔期末テスト〕

国語・74点

数学・56点

社会・70点

理科・55点

「じゃまでは問題ない。そつ、この先に今の状況を作り出した原因があるのだ。

英語・?点

誤魔化して済まない。正直に言おう。

英語・1点

・・・。

・・・。

どうだ驚いたか？1点だぞ。

勘で解いても10点くらいには当たるはずなのに1点なんだぞ。

名前書き忘れなんかじゃない。ちゃんと解いて1点なんだよー。

しかも、1問2点・3点の問題しかないのに・・・

どこからか、1点が舞い降りてきている。

神の慈悲？先生の慈悲？

どうせならクリスマスイブに休日をー

と、まあこんなこと言つても仕方ない。
すべての責任は僕にあるのだから。

教壇に立つ先生に目を向けて、一応まじめに受けける姿勢をとる。

先生・・・クリスマスイブの出勤、御苦労さま。

お腹を過ぎると気温も上がり、勉強にもよひやく精が出てくる。
朝からミッヂリ絞られていても、あと2時間・・・。
終わりが見えてくると、疲れなんて吹き飛んでいた。

「やるぞーーー！」

声に出せないので、教科書に書きこんだ。

教科書の中で、ジョディー先生がMr・スミスに・・・

おお、なんて日に毒な教材だらう・・・。

・・・

チク・・チク・・チク・・・

チク・・チク・・チク(タク)・・・

チク(るな)・・・チク(るよ)・・・

チク(なんで)・・・チク(は正直ものだから)・・・

チク(のバカ野郎)・・・

キーン、ローン、カーン、ローン・・・

脳トレは、3時で終了を迎えた。

学生としては超充実した一日だ。これだけ頭を使えば、先生も満足だらうよー

「よし。矢代、答案を出せ

答案?

そんなもののビリ・・・

「どうした、矢代」

机の上に真っ白の紙が一枚。

別のこと考えていたせいで、テスト中であることを忘れていた。

「先生・・・ワン、モア、チャンス」

結局学校を出たのは、4時前3分だった。

通学路を家に向かつて歩いて行く。

制服姿は俺一人くらいか・・・。トボトボ歩く後姿は、寂しさの極致だろうな。

哀愁漂う風景を、一人の美男子がさまよい歩いている（笑）。

「かずきーーー」

バカでかい声が後ろから聞こえてくる。

“私の後ろに立つのは何奴じゃ！” サムライの如く機敏に振り返った。

「かずきー、捕囚お疲れさまー。」

バカ！近所で“捕囚”なんて言葉使うな。

捕囚？

補習？

別にどうでもいいやー!とにかく“ほしゅう”って言つた。
俺は駆け寄つてくる幼馴染に田田で合図をした。

キラーン!

田と田が触れ合つ。その瞬間、赤外線通信が開始された。

『「じめん、叫ぶつもりじゃなかつたの。ただ和樹が帰つてくるのが見えたから、声をかけずにいられなくて』

（なんだあー。そういう事だつたのか。待たせて、すまない）

『「つうん、もういいの。帰つて来てさえくれれば、それだけで……』

（キラーン）

『カズキ』

「昨日貸した2000円返せーー！」

妄想通信はキラーンの叫び声によつて、余儀なく中断させられた。

田の前から走つてくる女。

俺の幼馴染で、名前を春木 代美（はるき よみ）といつ。

春の木（さくら）に代わるような美しい女性になれ、といつ願いを込めてつけられた名前らしい。

だが、ヨリミとは何とも呼びづらこ名前。なので、一文字足してキヨミってみんな呼んでいる。

春木のおじさん、勝手に名前を変えた「めんよ」。最初に呼び出したの、俺なんだ。
だから「めんよ」、春おじさん。

懺悔している間にキヨミが田の前まで来ていた。

「昨日貰った2000円? せまい、早く返して!」

「わかった、わかった。もう急かすなよ」

そう言つても、落ち着きを見せないキヨミ。
財布から千円札2枚を出すと、ハエを捕らえたカメリオのよう
にキヨミの右手がお札をかつむりついていた。

「よかつたあ~」

「キヨミ、いつたい何をそんなに急いでいるんだ? お金が必要なこ
とでもあるのか?」

「だつて2000円無ごと、サンタさんからプレゼント貰えないん
だもん!」

「What? おっと、つこつこ勉強の成果が・・・。

「何を言つてるんだ?」

「お父さんがね、『今日サンタさんから電話があつてな、トナカイ
が風邪をひいて倒れているらしい。うちにプレゼントを運んでくる
のはどうやら・・・。あ、心配するな。大丈夫。私が直接受け取り

に行くことにしたから。だが、サンタさんの所に行くためのお金がなくてな・・・』って言ったの。だから2000円必要なの」

何々・・・サンタ（三郎おじさん）から電話でトナカイ（歯科医の長谷川さん）が来れないから、代わりに来ないか（麻雀に）？で、2000円を持ったおじさんはプレゼントを買つお金を稼ぎに今から・・・

「あ～急がないと。プレゼント届かないよ。カズキ、それじゃあね」

走り去るキリミを見て、俺はつぶやいた。

キリミ、おまえのプレゼント・・・

今年は無いかも知れないと。

「ただいま」

玄関を開けて、帰宅の第一声を放つた。

「・・・」

まあ、誰も『おかえり』なんて言つてくれないよな。とつあえず荷物を置きに2階へ上がる。

ガチャ

ドアの向こうへ、そこには真四角な空間があった。

フローリングの床には青い絨毯が敷いてある。

部屋の右奥に机があり、その反対サイドにベッドが置かれている。ベッドの横には押入れがあつて、色々なものがゴチャ混ぜになつて収められている。

部屋全体はそんなに広くないが、狭くもない。

俺は机にカバンを置き、ベッドに腰をおろした。

「クリスマスイブねえ・・・」

制服を脱ぎながら、いつもと変わらない一日を退屈だとしみじみ感じていた。

・・・。

・・・。

「か・・・く・・ん・・お・・・て・・・『飯・・・』

?

「か・・・く・・ん・・お・・・て・・・『飯・・・』

“『飯””といつ単語。

俺の胃袋が急にうずき出す。

「かづくん、起きて御飯よ」

「はあーい

目を覚ました時、部屋はいつの間にか真っ暗になっていた。
午後7時半、ご飯の時間だ。

俺は一度背伸びをして、ベッドから腰を上げた。

一階の居間には家族全員が揃っていた。

「いただきま～す」

一同の声が重なり合い、食への感謝を表す。今日ばかりはみんな真剣に言っているようだ。

それもそのはず、今日の食卓は実に豪勢なんだから。

甘ダレで表面を焼いた七面鳥に、3種類のパスタ、ローストビーフ。ポタージュスープに、魚のムニエル、ライス大盛り付き。

一瞬ここが“最後の晚餐”の舞台に見えた。

「タツ、豊、純和風ティストがヨーロッパの・・・やつぱり田の錯覚でした。

「アニキ、食べないの？」

生意気そうな顔をした小娘が話しかけてくる。

「いや、食べるよ。ちょっとボーとしてた」

「勉強し過ぎで、頭がショートしてんじゃないの？」

「バーカ。今日一日でぶつ壊れるはずないだろ？」「

「それもそつか。アーキの場合、脳そのものがないんだったね」

「勝手に人を改造するな。ちゃんと脳くらい入っているわー」

「ふたりとも！食事中なんだから、もつと静かにしなさい」

「はあーい」

母の一喝で、俺らを静かな食卓へと戻つていった。

食事後、居間ではバラエティー番組が流されていた。
お笑い芸人たちがクリスマス返上で、国民に笑いをプレゼントしている。

もちろん、口々にも笑いがプレゼントされていた。
コタツに入つて、テレビに釘付けの父・母・妹・俺。
時刻は9時に差し掛かっていた。

「そしたら、デザートにしましょうか」

「番組終了」と同時に、母の声が聞こえてきた。

妹は“待つてました”とばかりに嬉しそうな表情を見せる。
俺も甘いものは大好きだから、心は躍つていた。表情には出してな

いけど。

キッチンの方から物音がし、その後でケーキを持った母が現れた。

ケーキ上では白い生クリームが雪を演出し、サンタとトナカイが愛らしい表情を浮かべている。

小さなリースがアクセントに添えられていて、クリスマスらしい仕様だ。

コタツの上にケーキが置かれると、一同テレビからケーキへと視点を切り替えた。

ケーキの上にろうそくを並べ、火を灯す。

すべての電気を消すと、ケーキに並ぶろうそくの炎がクリスマスの一夜を演出した。

「き~いよし~」の夜~」

クリスマスマードを高める歌が部屋全体を流れしていく。ろうそくの明かりが風に揺られながら辺りを照らす。

矢代家独自のクリスマス模様。そこには誰の関与もない。

歌が終わると、妹がろうそくを消してクリスマスマードを終わらせた。

ケーキを4等分して皿に盛り、フォークで口に運んでいく。

牛乳と合わせると、甘さが加減されて丁度いい味になる。

ケーキを食べ終えたときには、お腹はもう一杯いっぱいになっていた。

「そしたら

父が立ち上がりながら、言葉を発する。

二二九

子供のころから常に楽しみにしている瞬間。そう、プレゼントをもらう瞬間がきたのだ。

「まづは涼香（すずか）から」

父は隠していたカレンエフを妹に譲渡した。

「ありがとうー開けてもいい？」

「ああ、どうぞ」

涼香は包装紙を破り、中に隠れたモノを確認した。

「ああ、」れ・・・お父さん、ありがとう

涼香の手に乗っている品物、それはデジタルカメラだった。

卷之三

俺の中学時代と大きく差がないか。

「涼香は勉強頑張ってるみたいだから、『褒美さ』

父は満面の笑みで涼香を見ていた。

「さて、次は

いよいよ俺の番だ。

涼香にあんな良いものをプレゼントしてことなると・・・

「あ、お父さん。和樹の分は・・・」

「やうだつたな。すまないが、和樹。お前のプレゼントはもう口々にはないんだ」

なにー?

口々になにってどうこうことだ。

「実はね、和樹のプレゼントはある場所に隠してあるの。涼香に見られるとマズイから。でも大丈夫よ。和樹がいつも田にする場所に置いているから」

母が言葉をつけたして説明した。

涼香に見られるとマズイ?

ちょっと待てよ。涼香がデジカメだから・・・

おいおい、そいつはいつたいどれだけ高価なもんなんだよー!

高校に進学した途端、急激にレベルアップするのか?

俺は期待で胸がいっぱいになつた。

お風呂に入り、時刻はもうすぐ12時。
就寝時間が迫っている。

俺のプレゼントはまだ発見されていない。

“いつも田にする場所”って言っていたけど、それって何所なんだよ。

未だ見ぬプレゼントに、俺は不安と期待を膨らませていた。
楽しみは後になればなるほど、膨れ上がっていくモノ。

俺はベッドに入つてなおプレゼントの事で頭がいっぱいだった。

去年が受験のための問題集、その前がゲームソフト、さらにつきの前
は・・・何だっけ？

まあ、そんなことはどうでもいい。

今回は以前のモノと格が違うわけだから。
もしかしてロレックスとか？

七夕の短冊にそんなお願いをしたような気がする。
いや、それよりもっと高価なものだつたりして・・・。

ベッドで夢を描きながら、俺は眠りに入つていた。

前編（後書き）

彼のプロジェクトとは、皆さんも色々と想像しながら、次回を楽しみにしてください。

ドタドタドタ・・・・・

ガサガサガサ・・・・・

早朝、家の中を響き渡る物音。
発生源は俺の部屋。

現在プレゼントの検索中。

ドタドタドタ・・・・・

ガサガサガサ・・・・・

「カズキ！朝からいるでこわよ。何してるのー。」

母の怒りが、家の中に響き渡つた。

「プレゼント探してるんだよー。」

母の面倒な行為にこよつて生まれた怒りが呼応した。

「ひどな朝っぱらから探さなくていいでしょ。それより『飯できてるから、食べに来なさい』

「ああ。すぐ行く

1階の居間。焼き魚と味噌汁、「飯が並んだ我が家の食卓。昨日のクリスマスを微塵も感じさせない、いつもの姿である。

「 いただきます」

嬉しそうに涼香が言つ。

その姿が今の俺には腹立たしく思えた。

昨日のプレゼントでウキウキしてるのはわかるが、いつも事も
考えろ！

俺はまだ「プレゼント」と「対面できず」、イライラしてゐるんだぞ！

ぶすっとした表情で俺は魚を頬張つた。

食後お茶をすすつてみると、涼香が俺に話しかけてきた。

「 アニキ、 今日どこに行かない？」

「 ん？ 何でだよ」

「 昨日もひつたプレゼントを使いたいの？」

おれのイライラに油を注ぎやがつた。

「別に俺じゃないくともいいだろ？ 友達でも誘えよ」

「えー！？ だつて友達と撮つても面白くないもん。 アニキなりじるな姿でも絵になるし」

「そりゃーモ『テル並みのスタイルだからな

「「うん、 違うよ」

キッパリ否定。

「アニキを撮ればどの絵も面白おかしくなるから、 ネタになるのみんなに見せたら話題なくなる心配ないしね」

油eron追加します。

「ふざけるな！ そんな事なり向更行かん。 もともと行くつもりないし」

「行こうよ。 絶対楽しいから」

おまえがな。

「今日俺には予定があるの。 先約が入つてゐるから涼香とどこか行くのは無理」

「うむ。 アニキのケチ

と云ふか、 嫌！」

というか、バカ、アホ、マヌケ、ブサイク。お前の母ちゃん、で～べや。

自分の母親をけなすな。

むむむ～、まだお尻青いくせにー。

・・・・・。

・・・・・。

・・・・・。

言葉にならない暴力は止めましょう。結構傷つくから・・・

涼香との口論を終えた俺は、自分の部屋に戻っていた。

「よしー・屋ヤガシ、再開ーー！」

『気合』を入れなおして、搜索を開始した。

『か・ず・き・く・ん』

ん？

今俺を呼ぶ声が聞こえたような・・・

『か・ず・き・く・ん』

聞こえる、俺を呼ぶ声が。

プレゼントが俺を呼んでいる。

「待つてろー今見つけてやるから」

俺は声が聞こえてくる方へと向かった。

向かった先は、部屋の中にある唯一の窓。声は『』の向う側から聞こえてくる。

期待に膨らむ思いを押さえて、俺は窓を開けた。

ガラガラガラ・・・

窓の向こうに現れたのは、迷彩柄のクマ？

あれ？俺のほしいプレゼントじゃないような・・・

『か・ず・き・く・ん』

迷彩柄のクマが喋りかけてくる。

おお・・・なんとも恐ろしい光景だ。

「おまみづーかわせぬ

「ぬせよづー・・・・」

「ねえ～私がわいいでしょ？」

「はあ・・・かわいいですね」

「ウフ。かずき君ならそう思つてくれる信じてた」

「このクマ、今ウフフとか抜かしたぞ。
口調も女の子だし。ちよつとキモイ・・・・。

「かずき君だあ

「やの氣持ち悪いしゃべつやめひー・キミズー」

「あひー、バレた？」

クマの横からキミズーが顔を出した。

「ばれるも何も、始めからわかつてたし」

「なんだー、つまらないな

キミズーは頬を膨らませて拗ねたような顔をした。

俺の家とキミズーの家は横に並んで建つていて、俺の部屋からキミズーの部屋が見えるような造りになつていて。

女の子の部屋が見える、普通の男ならつれしく思える環境だね。

しかし、相手がキヨミとなれば話は別である。

この恋はいつしか俺とキヨミの電話代わりとなつていて、重要な事からくだらない事までここを通じて話が行われる。ほとんどくだらない話だが……。

よつて、俺のプライバシーは近所さんに筒抜け。キヨミの爆弾発言により、俺の素性はこの地域に住む人はもちろん、偶然通つた人今までバレてこる。

「ねえ、カズキ」

「なんだ？」

「これ……良くない？」

迷彩柄のクマの縫いぐるみを指して、キヨミが訊ねてくる。

「ああ、ここと繋つ

キヨミにしては珍しく女の子らしいアイテムだ。

「だよね。やつぱりカズキは私のよき理解者だ」

「ん？別におかしいところなんて、ないよな……。何かそいつにおかしなところでもあるのか？」

「ううん。それがね、私がこのクマかわいいって言つたら、お父さんとお母さんがおかしいって言つたの」

「普通にかわいいと思うが……」

「だよね。だつて迷彩柄だよー。自然の中で迷彩のクマがいたら絶対最強だと思うよね。そんな最強のクマちゃんを可愛いと思わないなんでおかしいと思わない？」

さすがに現実を交えられると可愛いとは思えん。

最強の捕食動物となつたクマなら尚更。。。

「カズキは私と同じだね」

「めんなさい。どうやら間違いででした。

「」のクマの何が良いつて。。。

俺の思いとは裏腹に、その後迷彩クマの話は続いた。

「カズキはプレゼント何貰つたの？」

クマの話が終わり、痛い所を突いてくるキツツキ。

「実はまだ貰つてないんだよ。で、今探しているといい

「やうなんだあー。それならわ、私が探すの協力してあげようか？」

「別にいいよ。たぶんすぐに見つかるだらう」

「私に任せなさいって。今すぐそっちに行くな

俺の言葉を無視して、キヨリは」うちにやつて来ようとしている。窓枠に足を置いて、少しだけ飛び込んでくるつもりらしい。

「行くが...」

キヨミが掛け声を上げる。

•
•
•
•
•

つて、ちょっと待つた！

「待て、キヨミー！」

ん?
」

「おまえそこからいいに来るつもりか」

「そうだよど

「アホだろ！ お前の部屋から俺の部屋まで何メートルあると思つてるんだ！ ！」

「へえ？」

「へえ？ じゃ ねえーよ。 3メートル以上ある所を飛べるわけないだ

「私魔法使いだから……てへ」

50

「・・・」

キヨミのバカさ加減に呆れたものの、何とか飛んでくる」とだけは阻止出来た。

残念そうな顔をするキヨミを見て、飛ばせておけばよかつたかもなんて思った事は内緒だが。

結局捜索の協力は断れず、キヨミが家へ来る事になった。
最強の助つ人を連れてくるとか言つていたけど、誰を連れてくるつもりだよ。

「カズキーちわっす」

ドアを勢いよく開けて、キヨミが部屋へ飛び込んできた。

「ちわっす、キヨミ」

「プレゼント捜索隊、只今参上しました」

「(汗)苦労さん。で、助つ人つて誰連れてきたんだ」

「よつー・アニキ」

わが妹が仲間に加わった。
最強の助つ人つて・・・「イツかあ。

「なんで涼香が最強の助つ人なんだよ」

俺は露骨に嫌な顔をした。

「違うよ。ここに来る道中で、偶然捕まえたの」

「そうですか・・・」

「で、最強の助つ人はこっち」

キヨミの背中から2つの物体が姿を現す。

・・・。

それ・・・やつきのクマでは?

「」の子たちが居れば、見つからないものはないよ

そういうキヨミの左肩には、もう一人の助つ人が乗っかっている。

迷彩柄の・・・何?

「あ、血口紹介がまだだったね。この子がティーベアのファルコンーで、こっちの子がピンクパンサーのランちゃん!」

おお~、ピンクパンサー殿でしたか・・・
もはやピンクじゃないけれど。

「で、そつらが俺のプレゼントを見つけてくれると?」

「うん」

“どうやら捜索は難航しそうです。

3人と2匹?は俺の部屋へ何とか入った。

そんなに広くない部屋に、この人数は正直きつい。
動きづらくなつた現状に、一人で探し物をした方が良かつたとしみ
じみ思つた。

「カズキ」

「なんだ?キヨミ」

「プレゼントってどんな物?」

「見てないからわからん

「匂いは?」

「そんなことはわからん。ただ匂いはしないと思ひ」

「それじゃあ・・・」の子たちの役目は無いんだね

残念ながら、もともと役には立たないぞ。

キヨミ、もつと現実を見る。

残念そうなキヨミを他所に、涼香は黙々と探し物をしていた。

「あつー。」

突然、涼香が声を上げる。

「どうした！何か見つかったか？」

「これ……」

俺とキリは涼香の手にのつていてる物体を見つめた。

・・・・。

「うわあああああ

「キヤーー

俺とキリの叫びが部屋中に広がった。

涼香の手の上にいるもの。

黒い胴体に無数の毛が生えている物体。
6本の足、体に描かれた黄色の紋章。

間違いない！

テレビでお馴染みの奴だ。

「タ、タ、タランチュラ」

なんで俺の部屋にそんな危険な生き物がいるんだよー。
そんなモノ飼つた覚えはないぞ！

「……にいたんだね」

涼しい顔で涼香はやつを見つめている。

「涼香！早く捨てろ！」

「大丈夫。だつてこいつ生きてないもん」

「へえ？」

「すっかり忘れてたけど、こんな所にいたんだ。アーニを驚かせようと思つて仕掛けていた事忘れてたよ」

「涼香？おまえ・・・」

よつやく状況が整理できてきたぜ。

俺の怒りはキヨリの声にかき消された。

「これ可愛いね」

「やれやれ。ナリ!! わん、 ジル。」うの好きだもんね」

女の子がエライ発言をしてますぞ。

「アーニ、これ可愛いよね？」

•
•
•

『やつやうじの空氣にのれていのいのは俺だけのようです。

キヨミと涼香がタランチュラについて熱く語り合っている間、俺は一人搜索を再開した。

机と壁の間、ベッドの下、絨毯の下。

すべてにおいて涼香の仕掛けが見つかった。

俺の部屋はいつの間にかデンジャラスなサファリパークへと変貌していたようだ。

もしも知らずに大掃除を迎えていたら、

・・・・

恐ろしくて想像したくない。

たぶんショックで死んでいただろ。

『妹の仕掛けに兄死にかけ』

今年最後のニュースをこんな記事で飾りたくはないな。

しばらく一人で作業していると、途中でキヨミと涼香も作業を加わった。

10分間もよく語り合えたものだ。

部屋の大半は調べたが、依然プレゼントは発見できず。もしかしてこの部屋にないのか？

不安を抱えながら、残った押入れの搜索に踏み入った。

「やつぱり隠すとなると、いじしかないよね

「そりだよね。でも、『ニアーキ』がよく田にする場所なのかな？」

同感だ、妹よ。押入れなんて頻繁に開ける場所じゃない。

「まあ、探してみればわかるよ」

キヨミが押入れの扉を開いた。

ガサ、ゴソ、ガソ、ゴソ、・・・・・

キヨミと涼香が押入れの隅々を探索する。
二人分の幅しかない押入れの入口。

俺は一人の探索風景を後ろで見守つている。

「案外キレイにしてるんだね~」

「まあな」

「よし、今度は『ニアーキ』ドッキリを・・・・

「変な事を考えるなー。」

ふざけ合いながらも、調査は真剣に行われた。

「やつぱりないね・・・・

「ホント」

結局押入れからも見つからなかった。

それじゃあ、俺のプレゼントはどうだ？

次の探索ポイントを考えている俺の前で、キヨミが押入れの扉を閉めようとした。
その時だった。

「あれ？ 押入れの天井に・・・」

「ああ～。あれは屋根裏部屋へ繋がる扉だよ」

涼香が答える。

「あそ」・・・怪しいね！」

キヨミの目が光る。

屋根裏部屋。

普段は使われないため、いつしか家族みんなの記憶から除外された
場所だ。

・・・・。

つて、ちょっと待つた。

心の声を無視してキヨミが扉を開ける。

そこには、

俺の・・・俺の・・・

シークレットプレイスじゃねえかよ！

「シークレットプレイス」

俺の大切なシークレットアイテムを保管している場所である。

シークレットアイテム、それは・・・男の宝である。

「ちょっと待った！」

俺は大きな声でキヨミを止めよつとした。
しかし、キヨミはそれを無視して屋根裏部屋へ顔を突っ込んでしまつた。

終わつた・・・。

俺のテンションは最低のラインまで落ちて行つた。

「あつーあつたよ

「え？」

キヨミが屋根裏部屋から綺麗に包装された物体を取り出してきた。

「キヨミさん、すいーい

涼香がキヨミを褒めたたえる。

キリ!!の声には確かにプレゼントらしき物があった。

でもどうして? ハハ?

『和樹がいつも田にする場所に置いているから

母の言葉が頭をよぎる。

いつも田にする場所=シークレットプレイス

なるほど! 敵ながらあつぱれ。

つて、もうシークレットじゃなくなってるし。

一体いつから知っていたんだマイ・マザーは・・・。

プレゼントが見つかって嬉しい反面、母への恩返しだに震えた。

「ねえ、カズキ。プレゼント開けてみてよ!」

「そうだよ。アニキがどんな物願ったのか気になるし」

「わかった、わかった」

急かす一人を前にして、俺は包装を取り外していく。

「いべどー!」

最後の包装を破り捨てて、プレゼントがその姿を現した。

「・・・」

「・・・」

「・・・はあ？」

姿を現したプレゼント。それは予想に反するモノだった。

サンタがくれたプレゼント。

それは、シークレットアイテム×3。

どういう事だ？

高校生になつてレベルアップしたはずのプレゼントが、なんでこんなモノなんだ。

ロレックスは？高級なプレゼントは？

変な方向にレベルアップしてしまつたアイテムに、俺たちはただ黙つているしかなかつた。

「カズキ・・・」

「アニキ・・・」

冷たい視線が俺に突き刺さる。

俺だつてこんなモノ望んでないぞ！

反論したいが、そんな状況ではない。

「最低」

キツツキの一瞬に、部屋の気温が一気に下がられた。

ドタドタドタ・・・

「母さん・」

俺はプレゼントを抱えて、居間で寝ころんでいた母を怒鳴りつけた。

「なんだよ、これーーー！」

プレゼントを母に突き付ける。

「あ、プレゼントを見つけたのね」

母は冷静に言葉を返してきた。

「見つけたのね、じゃねーだろ。何だよ、このプレゼントがーーー！」

「あら？ カズ君の欲しかったものじゃなかつた？」

「なんで俺が、こんなモノをクリスマスプレゼントとして欲しがるんだよ！」

「だつて先月燃やしちやつた時、すゞく落ち込んでたじゃない。俺の宝が、青春が・・・なんて言つて」

うん。確かに言つました。

「だからつて、こんなモノを欲しがるわけないだろ！」

「そんな大声あげないでよーもつプレゼントしてしまつたんだから、仕方ないでしょ」

俺は泣きわいつになつながらも、母をじつと睨みつけていた。

「それいこじゃない。クリスマスのプレゼントとしては最適よ」

「なんだだよ」

「聖なるプレゼントが性なるプレゼントなんて」

下ネタでキレイなオチをつけよつとするな！ クソババア！！

俺は母が枕に使つていた座布団を、引きぬいてやつた。

「はあ～」

ナーバスな気持ちを隠しきれない俺はトボトボと階段を上がった。

期待を込め過ぎた俺が悪いのだろうか・・・。

昨日夢の中で膨れ上がったプレゼントは、跡形もなく消え去った。手には現実のプレゼントが抱えられている。

これでビックリするだよー

俺はプレゼントに目を向けた。

聖なるプレゼント・・・性なるプレゼント・・・。

どんどん気持ちが落ち込んでいく。

俺は頭を振って、気持ちを前向きに切り替えた。

こいつらに罪はない。そうだよな?

俺が夢見たのが悪いんだ。

こいつらだって俺を落ち込ませたくて存在しているわけではないんだから。

落ち込んでいた気持ちが、少しずつ上がっていく。

俺が悪かった。

心の中でプレゼントに謝った。

聖なるプレゼントは、精が出る（やる気を出す）プレゼントへと変わつていった。

俺の顔にも笑顔が戻つてくる。

平凡なクリスマスは、最後に笑顔をプレゼントしてくれた。

パシャ

階段の上から光が飛んでくる。

そこにはデジカメをもつた涼香がいた。

「へ・ん・た・い」

嬉しそうに涼香がつぶやく。

。 。 。

ちつぱり最低のプレゼントだ、バカヤロー！――

後日。

口本を持ってニヤつぐ俺の写真が近所にふりまかれたのは言つま
でもない。

消えたクリスマスプレゼント（完）

はじめまして、イヌズキノネコです。

本作品はいかがでしたでしょうか？

初めてコメディーを書きましたが、最後のオチがあんなんですみません。

今後コメディーも書いていこうかと検討している中で生まれた作品なので、もし良ければ評価までして頂けると幸いです。

最後に読んでくださった皆さんへ

『良いクリスマスを！』

イヌズキノネコでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0838d/>

消えたクリスマスプレゼント

2010年10月15日21時46分発行